

二〇二六年度
教育発達学科

小論文

〔自己推薦AO(A)〕

14-02

注意

- 一. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
- 二. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所記入してください。

問題 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

アタッチメント理論は、子どもにとっての、大人との関係の意味を教えてください。子どもに関わる人、直接間接につながりうるすべての人にアタッチメントを知っていただきたいと思うのは、それが子どもに、自分自身の価値を信じること、安心できるという感覚、人や社会は信頼できるという気持ちを育む基盤であるからです。そして、誰かとの間でそうした気持ちを経験できた子どもは、これから続く長い人生を「何かがあっても何とかなる」という心持ちで歩んでいけるようになると思います。

アタッチメント理論は、イギリスの児童精神科医、ジョン・ボウルビーによって提唱されました。アタッチメント(Attachment)は、我が国では「愛着」と訳され、現在もこの表現が多く用いられています。

「愛着」と聞くと、密なる母子の関係を思い浮かべる方も多いのではないかと思います。親子の間の、本によっては「母子」の間の、特別で深く強い「絆」であるとは簡潔に説明されることも多いようです。ボウルビーの著書が日本に紹介されたとき、「母子関係」という表現が使用されたことも、象徴的です。とはいえボウルビーの著書自体においても、母子が中心的に扱われることが多かったので、母子関係が想起されやすいのは日本に限ったことではありません。

確かに、子どもが母親との間に築く関係は、重要なアタッチメントの姿です。母子間に、深く強い絆を感じ取った実体験を持つ方もたくさんいるでしょうし、母と子の間の、他者には入りがたいような関係がまとう、あるいはまとわされている特別感は、大きいように感じられます。

(中略)

アタッチメントは母子関係に限らない

そのためにまず、愛着の「愛」ではなくて、「着」の方に注目します。愛着という字を読むと「愛」に目が行きがちなかもしれないので、この本では「愛着」ではなく、アタッチメントと表します。無論、「愛」も大切ですけれども、ここでは

「着」の方を考えたく思いますので、どうかひと時「愛」は忘れてください。

アタッチメントの直訳は、「つくこと」です。子どもは、落ち着かなかつたり、心がソワソワしたり、寂しかったり怖かったりするとき、自分よりも大きくて強くて優しくて賢い^{かしこ}人に、くっつきまします。くっついて安心や安全を感じ、心の穏やかさを取り戻します。心穏やかになれば、持ち前の元氣と明るさと勇氣を心に取り戻して、子どもは再び遊びに出かけていくでしょう。怖いなあ、嫌だなあと感じたときに、あるいはこれから感じそうなときに、大人にくっつきたいと思いいくつかせてもらい、安全だ、安心だという気持ちを取り戻して感じられること。これがアタッチメントの要です。

くっつく相手は必ずしもお母さん限定ではありません。お父さんだったり、おじいちゃんおばあちゃんだったり、保育園や幼稚園や学校の先生だったりもします。子どもは自分よりも強くて優しい、いろいろな相手との間にアタッチメント関係を築きます。子どもを育て、守り、心を注いで子どもの育ちに関わっている大人は、誰もが、子どもがアタッチメント欲求、くっつきたいという欲求を向ける対象になりえます。その対象の中に、お母さんが含まれることは現実的に多いでしょうが、それは「お母さんでなければならない」ということではありません。

本書では便宜上、子どもと関わる大人を「養育者」と表現したり、具体的な子どもの経験を説明するために、例として「親子関係」や「親」という表現を使用したりします。けれども、繰り返しますが、本書で想定している大人は、子どもの親や親戚、保育、幼児教育、学校の先生、職員の皆様、地域の子育てサークルや乳幼児クラブ、学童クラブに関わる方、習い事や塾の先生、スタッフの方々など、子どもにつながって育ちを支えている大人たちすべてです。さらに、今は直接のつながりはなくても、これから子どもにつながる可能性のある大人たちも含まれます。

よって、「養育者」や「親」という表現を例としている部分を、ご自身の立場に置き換え、子どもと関わる当事者の視点で読み進めていただければと思います。

ゆりかごから墓場まで

アタッチメントについても一つ重要なのは、大人にもある、ということです。アタッチメント理論を構想したボウル

ビーは、それが決して幼い子どものものだけではなく「ゆりかごから墓場まで」、つまり、一生にわたって私たち人間の毎日に、大切な働きをもっているということを示しています。

この本を手にとってくださった大人のあなたにも、落ち着かなかったり、寂しかったり、怖かったりするときはあるでしょう。そんなときは大人も、強くて優しく守ってくれる、あなたにとって大切な相手にくっつきまします。手をつないだり、抱きしめてもらったりすることで、安心を感じるでしょう。物理的、身体的に相手にくっつくことは、大人になっても安心を感じられる強力な方法です。

けれども、大人は、物理的に相手にくっつくことができないとき、イメージのレベル（これを表象的レベルと呼びます）で、すなわち頭の中で想像したり心に思い浮かべたりして、その人とのつながりを感じるができます。そのため、大人になるにつれ、くっつき方が変わります。抱っこが電話に、おんぶがメールになるのです。大人のあなたも、そうやって「心の中でくっつく」ことで、穏やかさを取り戻しているはずです。その感覚は、子どもじみているとか、精神的に自立していないといったことでは全くありません。むしろとても自然で、当然で、健康的なことです。

現在、アタッチメント理論は、子どもと大人の関係の研究や臨床的実践の分野のみならず、人の生涯にわたる健康、パーソナリティ発達を理解する枠組みとして幅広い年齢を対象に検討されています。大人の心身の健康や社会的適応、生活との関連が精力的に研究されているのです。この理論が「ゆりかごから墓場まで」私たちに関係していると、多くの研究知見が物語っています。

くっつくこと、離れること

「くっつくこと」は、甘えや弱さではなくて、むしろ反対の、自律した心の成長を支えるものなのです。私たちは、いつでもくっつけるといふ確信があるとき、離れることができます。反対に、もうくっつけないかもしれないと思うと、離れがたくなります。逆説的に聞こえるかもしれませんが、くっつくことを考えることは、離れることを考えることになります。

これはアタッチメント理論の中核であり、面白さだと思います。人と人との信頼に満ちた情緒的關係は、まずはくっつく

ことを思い浮かべさせます。ただそれは同時に、いつでもくっつける関係が自分にはあるという心の安心、安全の感覚が、しばしその関係から離れることを可能にするのであり、自律的に活動する人間の成長を支えるものになるのです。

本書では、人生の始まりの時期のお話を中心です。けれども、子どもたちは皆、やがて大人になります。皆さんにイメージしていただきたいのは、子どもたちが、信頼できる人との関係の中に安心、安全を感じることによって、自分の足で自分の道を歩む姿です。誰かに手を引く張つてもらったり、背中を押されたりしながら歩かされる姿ではありません。

手を引いてくれたり、背中を押してくれる人の存在は、とてもありがたいものです。本人のちからでどうにもならないとき、そうやって無理やりにも歩かせることも、結果的には意味があるということだって、もちろんあるでしょう。しかしながら、アタッチメント理論では、そんなふうに他律的に歩く人間の姿ではなく、自律的に自分の足で歩く人間の姿を考えます。

自律的に歩くということは、一人で歩くということではありません。誰かとつながっているから、必要なときにその人のつながりをいつでも感じることができから、私たちは一人で歩くことができます。そうして歩きながら、新しい出会いを得て、新しいつながりをつくっていくのだと思います。この本を読んでいるあなたもきつと、かつてそうして支えられて、一人で歩くことができるようになったことでしょう。そして、一人で歩くのがつらいときは、誰かと手をつなぐことで、もう一歩が踏み出せるという感覚を経験してこれたと思います。

大人の胸に抱かれていた赤ちゃんが、手をつながれて歩いた子どもが、今に一人で歩き始めます。大人は、子どもが自分で、力強く世界を歩んでいくことを願っています。願うだけではちよつと足りないから、私たち大人が具体的にできることを、考えていきます。

（篠原郁子『子どものこころは大人と育つ』／光文社新書）

問一 筆者は、傍線部で「アタッチメント理論は、子どもにとっての、大人との関係の意味を教えてください」と述べている。傍線部を踏まえて、かつ、本文の用語を用いて、「アタッチメント理論」を三五〇字以上四〇〇字以内で説明しなさい。

問二 アタッチメント理論を踏まえたとき、幼児や児童と関わる場面において、どのように子どもと関わることを望ましいと考えますか。あなたが考える子どもとの関わり方について、具体的な場面を設定して、五〇〇字以上六〇〇字以内で説明しなさい。